

2023年6月18日 説教「イエスを大胆に宣べ伝え」

使徒の働き 9章 19b～31節

ダマスコへの途上でキリストと出会ったサウロですが、3日間目が見えなくなりました。導かれたアナニヤを通して、サウロの目は開けられ、バプテスマを受けました。彼のクリスチャンとしての新しい出発でした。



1. キリストを証しするサウロ (19b～22節)

①伝道開始 (19b～20)「サウロは数日の間、ダマスコの弟子たちとともにいた。そしてただちに、諸会堂で、イエスは神の子であると宣べ伝え始めた。」

サウロは数日、ダマスコにあって、キリストの弟子達とともに過ごし、静かにしていました。しかし、その後は黙っていられず、諸会堂に出て行って伝道を始めました。彼はイエスが神の子であると、確信をもって伝えたのです。

②かつてのサウロ (21)「これを聞いた人々はみな、驚いてこう言った。『この人はエルサレムで、この御名を呼ぶ者たちを滅ぼした者ではありませんか。ここへやって来たのも、彼らを縛って、祭司長たちのところへ引いて行くためではないのですか。』」

しかし、この事態に接した人々は戸惑いました。なぜならば、サウロはエルサレムではクリスチャンを迫害した人です。また、ダマスコにやって来たのも、クリスチャンを捕縛して祭司長たちの所に引いていくためであったはずですから。そんなサウロがどうしてキリストを伝えているのだと思ったのです。

③ますます力を増し (22)「しかしサウロはますます力を増し、イエスがキリストであることを証明して、ダマスコに住むユダヤ人たちをうろたえさせた。」

サウロ自身はそんな評判など気にせず、キリストを伝え続けます。そして、主は彼に力を与えてくださり、イエスがキリスト(救い主)であることを大胆に証明していったのです。ダマスコの人々はうろたえるばかりでした。

2. サウロの殺害計画とエルサレム教会の仲間 (23～27節)

①陰謀 (23～25)「多くの日数がたって後、ユダヤ人たちはサウロを殺す相談をしたが、その陰謀はサウロに知られてしまった。彼らはサウロを殺してしまおうと、昼も夜も町の門を全部見張っていた。そこで、彼の弟子たちは、夜中に彼をかごに乗せ、町の城壁伝いにつりおろした。」

多くの日数とはどのぐらいでしょう。サウロの伝道がますます活発になって、ユダヤ人にとっては放置できないほどになっていた頃でしょう。サウロの伝道には力があり影響がありましたから、ユダヤ人たちはサウロを殺す相談をしたのです。しかし、その陰謀はサウロの耳に入り、サウロを通してクリスチャンとなった者たちは、サウロをかごに乗せて、城壁からつり下して逃がしたのです。周りの者達もサウロの命を守ることに命をかけました。

②仲間に入ろうと (26)「サウロはエルサレムに着いて、弟子たちの仲間に入ろうと試みたが、みなは彼を弟子だとは信じないで恐れていた。」さて、ダマスコを去ったサウロはエルサレムに向かいました。そこには、エ

ルサレム教会があり、キリストの直接の弟子達はもちろん、多くのクリスチャンがいました。サウロはキリストの群れの中に溶け込もうと努めました。クリスチャンたちはまだ彼が本当に回心したのかどうかを疑い、かつての迫害者サウロのことを想定し、怖れていました。

- ③バルナバのとりなし (26~27) 「ところが、バルナバは彼を引き受けて、使徒たちのところへ連れて行き、彼がダマスコへ行く途中で主を見た様子や、主が彼に向かって語られたこと、また彼がダマスコでイエスの御名を大胆に宣べた様子などを彼らに説明した。」

そのなかで、サウロを擁護したのがバルナバ(慰めの人という意味)でした。彼は使徒たちの所にサウロを連れていきました。そして、彼がダマスコ途上で主イエスと出会ったこと、主が語られたこと、ダマスコでキリストを大胆に語っていったことなどを、説明したのです。使徒たちに信頼されていたバルナバのとりなしによって、使徒達も納得していったようです。

3. 教会の広がり (28~31 節)

- ①兄弟との友好 (28) 「それからサウロは、エルサレムで弟子たちとともにいて自由に出はいりし、主の御名によって大胆に語った。」

バルナバのとりなしもあり、サウロはエルサレム教会の交わりの中に、なんの気遣いもなく出入りできるようになりました。そして、主の御名によって、大胆にキリスを伝えて行ったのです。

- ②ヘレニストへの伝道 (29~30) 「そして、ギリシャ語を使うユダヤ人たちと語ったり、論じたりしていた。しかし、彼らはサウロを殺そうとねらっていた。兄弟たちはそれと知って、彼をカイザリヤに連れて下り、タルソへ送り出した。」

サウロは、彼に敵対する人々にも伝道しました。ここにはギリシャ語を使うユダヤ人とありますが、ヘレニストと言われる人々です。彼らはステパノの殉教にも関わりましたが、サウロはさらに説得しにくい存在と思っていました。そこで、彼らはサウロ殺害を計画しはじめました。エルサレムのクリスチャンは、そのことをつかむと、サウロを地中海沿いのカイザリヤに連れて行き、さらにサウロの出身地であるタルソに送り返したのです。

- ③前進する教会 (31) 「こうして、教会は、ユダヤ、ガリラヤ、サマリヤの全地にわたり築き上げられて平安を保ち、主を恐れかしこみ、聖霊に励まされて前進し続けたので、信者の数がふえて行った。」

7 章に出て来るステパノの殉教、9 章のサウロのキリスト信仰への転向に伴う抵抗などが、教会には試練や挑戦となったのは確かです。しかし、それらを越え、ある面では用いられて、教会はユダヤ、ガリラヤ、サマリヤに広がる地において築き上げられ、平安を保っていきました。教会の基本姿勢は主を恐れかしこみ、聖霊に導かれて歩むことでした。教会は前進を続けました。その結果、信者の数が増えて行ったのです。

《結論》

サウロ(使徒パウロ)が後に記した書簡はローマ人への手紙から、ピレモ

ンの手紙までです。そこにはキリスト教信仰の根本、クリスチャン生活の実際などが記されています。言い方を変えれば、イエス・キリストによって語られたこと、なされたことが、体系的に述べられていると言えるでしょう。それでは、それらはどのようにして、サウロのうちに形成されていったのでしょうか。

一つには、彼が当時の学問世界に通暁していたこと、また律法理解においてもガブリエルの下で学んだことが、その基礎にあったと言えます。その上で、サウロが教会での交わりと宣教の実践を通して、彼の内にそれらが熟成して行ったと言えます。

その面では、サウロはクリスチャンになって、まずは交わりの中に入り、兄弟と融和しました。ともに礼拝をささげ、交わることを重視したのです。そこから送り出されるようにして、彼は現場に出かけ、イエスを宣べ伝えたのです。理屈に溺れることないように、現実の人々に関わりました。彼は誰に対しても大胆に語りました。立場を転向したことで、反対勢力となったヘレニストやパリサイ人たちにも、臆することなく語り告げました。その結果、自らの命が危険にさらされることになりましたが、主なる神は彼の命を守られました。主なる神は、サウロが三回にわたる伝道旅行を実現させようとしていたからでしょう。その伝道旅行を通して、各地にクリスチャンが多く生まれ、教会が建てられていきました。また、各地の牧会伝道を通して、サウロのうちに福音やキリスト御自身やクリスチャン、教会などについての理解が熟成していったことでしょう。異邦人が聖霊に導かれ、次々にクリスチャンになっていったことの意味を確かなものにするにも力を注ぎました。

川崎市の佐々木炎牧師は、電化製品も風呂もない貧困の家に育ち、父は働かず、家族は母のパートの収入で生きました。暴力を振るう父親からの反発で、家族や社会を恨み、いつの間にか不良グループのリーダーになっていました。高校からも謹慎処分となっている時に、教会に行き着きます。そこで、一匹の羊を助けてくださるキリストに出会い、初めて他者から必要とされる喜びを体験します。現在はデイサービスで、さまざまな背景の人々を受け入れ、地域に開かれた施設兼教会の牧師として、大いに用いられています。

今、私たちの教会も、コロナ問題を考慮しつつ、いよいよ具体的な伝道、宣教をしていく時期に入ろうとしています。そこで、今朝の聖書箇所から学べることは、まずは礼拝と霊的交わりを重視しましょう。何よりもキリストを知ることが優先しましょう。そして、学んだキリストを証していくのです。当時のサウロもまだ、福音理解もまともでなかったと思います。自分はまだわかっていないからなどと言う必要はないのです。自分に与えられた、主からの恵みをそのまま証していけば良いのです。キリストを人に証しすることは、キリストを新たに発見することにつながり、恵まれます。また、そのことを通して、私たちの教会も 31 節にあるように、平安に満ち、主への恐れが生じ、聖霊に励まされて、前進し続けることでしょう。そして、この困難な時代にあっても、キリストを信じる人々が増やされ、用いられる教会になると信じるのです。主の恵みが豊かに注がれますように。